

作品解釈の正しさを現実の作者の意図との一致に求める現実意図主義者たち（Actual Intentionalists）は、その対極にある立場、すなわち、意図を参照する必要はないし、参照すべきではないとさえ主張する反意図主義者（Anti-Intentionalist）に反論する際、しばしばアイロニーを論拠としてきた。というのも、アイロニーが、字義通りの意味とは反対の意味を指し示すものである以上、その理解には作者の意図への参照が不可欠だと言えるからである。本発表では、まず、アイロニーに関する現実意図主義者たちの理解が孕んでいる問題点を検討する。そうすることで、そもそも芸術作品一般において、作品の意味はそこに現れる微妙な差異にあることを示し、日常的行為のように単純に意図に結び付けられないことをはっきりさせる。そして、この微妙な差異の重要性ゆえに、作者の意図が作品の意味を確定する根拠になりえないという結論を導く。

現実意図主義的なアイロニー理解に対しては、少なくとも三つの反論が考えられる。第一に、ダニエル・O・ネイサンが指摘したように、アイロニーの正しい理解には、適切な文脈を把握するだけで十分であるし、そうでなければならない。第二に、ロバート・ステッカーらが提案する穏当な現実意図主義（Moderate Actual Intentionalism）、つまりテキストの意味に反しない限りで作者の意図を優先するという立場をとる場合、テキストとは逆の意味を持つアイロニーをうまく扱えない。第三に、アイロニーの解釈にとって、ひとつの意味に確定することよりも、作者があえて反対の意味を持つ表現を用いたという点こそが重要であり、意図主義ではその点を捉えそこなう。

したがって、何が意味されているかではなく、どのように表現されているかが、芸術作品の解釈にとって決定的なのである。例えば人物画を描く場合、それが誰か認識できるように描けば良いというわけにはいかない。むしろ、その描き方、すなわち、色彩や描線のわずかな違いがその作品の意味を構成し、作者の意図はそこに向けられる。しかし、意図という観念的なものを知覚可能な対象に変換する以上、そこには避けがたいずれがあり、作品に微妙な差異を生じさせる。この差異は、手段はどうあれ目的さえ達成すれば良い日常的な意図の実現においては問題とならないが、芸術作品においては決定的な違いとなる。さらに、制作過程で生じる差異は、作者にフィードバックされてその意図を修正させることもあるし、その差異がどのように解釈されるかは、鑑賞者を含む鑑賞時の状況全体に依存するため、制作時には正確に予期しえない。

そのような微妙な差異のすべてを作者が事前に意図して制御しえないため、事実上、作者の意図は解釈の根拠にならない。また、作品の意味は、制作時の作者には知りえない鑑賞状況の多様な文脈に影響されるのであり、さらに、そこには鑑賞者という他者が含まれるのだから、原理上、作者の意図は解釈の根拠とはなりえないのである。